様式Ｃ－１９

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成２４年５月２０日現在

機関番号：１２６０６
研究種目：挑戦的萌芽研究
研究期間：2009～2011
課題番号：２１６５２０１５
研究課題名（和文）園田高弘研究
——使用楽譜と蔵書の解析及び弟子へのインタビューを通して——
研究課題名（英文）Research on Takahiro SONODA: Based on an Analysis of his Collections of Musical Scores and Books, and Interviews with his Mentees
研究代表者
山下（坂田）　薫子（YAMASHITA-SAKATA　KAORUKO）
東京芸術大学・音楽学部・准教授
研究者番号：90283324

研究成果の概要（和文）：本研究は、ピアニスト園田高弘（1928～2004）の功績を、演奏と教育の両面から明らかにすることを目的に行われたものである。具体的には、彼の蔵書と所蔵楽譜のデータベース化および校訂譜の解析を行うとともに、実際に指導を受けたピアニストたちへの聞き取り調査等を行った。その結果、彼が音楽に対峙する自らの姿勢を示すことによって後進を導こうとしていたことが明らかとなった。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this study is to clarify the achievements of Takahiro SONODA (1928-2004) as a pianist and an educator.　We listed his collections of books and musical scores on the database, analyzed his revised scores, and interviewed some pianists who had learnt piano from SONODA.　Consequentially we found that he had given guidance to the younger pianists by showing his own attitude towards music.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
２００９年度	700,000	0	700,000
２０１０年度	900,000	0	900,000
２０１１年度	500,000	150,000	650,000
年度			
年度			
総　計	2,100,000	150,000	2,250,000

研究分野：人文学
科研費の分科・細目：芸術学、芸術学・芸術史・芸術一般
キーワード：園田高弘・芸術諸学・西洋音楽受容史・音楽教育史

１．研究開始当初の背景

(1) 研究の契機

本研究は、園田高弘の遺族（夫人園田春子氏）より、東京芸術大学音楽研究センター（以下、音研センター）に対して、蔵書（一般書を除く）や所蔵楽譜等の寄贈が提案されたのを契機に始まった。

史資料が散逸する前に本研究に取り組むことができたことに対し、千載一遇の好機を得たと、研究チーム一同、感謝している。

(2) 先行研究の状況

「芸術学」分野において、演奏史の研究と、その教授・学習の研究は、まだ緒に就いたばかりであり、量的にも質的にもいまだ十分な状況とは言えない。それに対して、本研究の斬新な点は、多様な分野の研究手法を融合させて、日本における西洋音楽の受容の研究に取り組もうとした点にある。

園田高弘（以下、園田）という戦後の音楽界をリードし続けたピアニストに焦点をあてて、その人物像を複眼的に描き出す試みに

よって、音楽学と音楽教育学における西洋音楽受容史の研究に、新たな一頁を加えることができると考えた。

２．研究の目的

(1) 蔵書と所蔵楽譜のデータベース化

園田の蔵書と所蔵楽譜の全体像を把握し、その特徴を明らかにするため、これらをデータベース化することが第１の目的であった。

この作業を通して、音研センターに「園田高弘文庫」を設置し、一般に公開できるようにすることを目指した。

(2) 園田の音楽観を明らかにすること

世界の第一線で活躍する日本人としては先駆的な存在であった園田が、西洋音楽の背後にある精神性をどのように理解していたのかを探ることが第２の目的であった。

併せて、園田の演奏解釈の特徴と、後世に伝えようとした音楽観の解明を目指した。

(3) 園田の音楽教育観を明らかにすること

これまであまり語られることのなかった、教育者としての園田の人物像に迫ることが、第３の目的であった。

父、園田清秀（1903-1935）から絶対音早教育を受けたこと、家には父がパリから買って帰った楽譜が大量にあったこと、そして幼少よりレオ・シロタ（1885-1965）に師事したことなど、音楽的に恵まれた環境に育った園田が、どのような教育観に基づいて指導を行っていたのか、その実態解明を目指した。

(4) 音楽家研究の一方法論を提示すること

音楽、そして芸術の営みは、それ自体が教育的であると言われる。したがって、音楽家の人物研究には、常に教育的な視点をもって取り組むことが望まれる。

本研究においては、音楽学と演奏学、音楽教育学、そして書誌学を専門とする研究者が協力し合い、演奏家の功績を多角的にとらえるための方法論を開発することが、第４の目的となった。

３．研究の方法

(1) 書誌学的観点からの考察

音研センターに寄贈された園田の蔵書と所蔵楽譜を、書誌学的な方法により分類、整理した。傷んだ箇所には修復を施しながら、慎重に作業を進めた。

史資料は、著者名、書名、編集者、出版社、出版年、シリーズ名・巻次、ページ数などの基本事項はもとより、書込みの有無や傷み具合などについても、すべてデータベース化した。さらに、音研センターの分類にならい、すべての史資料に請求記号を付した。

(2) 音楽学・演奏学的観点からの考察

これらの史資料に基づき、音楽学と演奏学の観点から次の３つの作業と考察を行った。

①園田の著作物と史資料との照合

園田の自伝的文献で言及されている書物や楽譜を史資料と照合し、蔵書への書込みや挿み込まれたものを丹念に調べ上げ、伝統の継承と、西洋音楽の研究・実践という２つの視座から、その人物像を探った。

②所蔵楽譜への書込みと CD との照合

所蔵楽譜への書込みの中から、筆跡や CD の演奏との照合に基づいて、園田自身による書込みと考えられるものを抽出した。そして、これらを分類し、各々の特徴を明らかにした。

③校訂譜と所蔵楽譜との比較

園田が校訂を手掛けた楽譜には、J. S. バッハの《インヴェンション》、《シンフォニア》、《平均律クラヴィーア曲集（以下、平均律)》第１巻、第２巻、L. v. ベートーヴェン《ピアノソナタ》全 32 曲が存在する。そのうち、本研究では特にバッハの《平均律》に焦点を当てて、所蔵楽譜との比較を行った。この作業を通して、フレージングや強弱、表情記号などの多様な可能性の中から、１つが選択されるに至る過程を描き出した。

(3) 音楽教育学的観点からの考察

音楽教育者としての園田の素顔に迫るため、まず先行研究や弟子たちによって書かれた記事を収集し、検討を加えた。

その上で、園田の指導理念や具体的な指導方法、内容等を浮き彫りにするため、園田に指導を受け、現在、ピアニストとして活躍する次の３名を対象に、約１時間ずつの半構造化面接を行った（括弧内は師事歴)。

Ａ：男性、35 歳（マスタークラスで４回、個人レッスン１回）

Ｂ：男性、45 歳（小学校６年生より個人レッスン、節目で）

Ｃ：女性、46 歳（音楽大学にて５年間、個人レッスン約 10 回）

４．研究成果

(1) 史資料の特徴

和書が 364 点、洋書が 278 点、楽譜は 3,295 点に上り、個人の文庫としては最大級の規模を誇っている。

蔵書の種類と範囲は、作曲家研究、音楽評論、ピアノ、音楽史、音楽家に関連するものはもちろんのこと、音楽社会学や音楽教育、他分野の芸術に至るまで、多岐にわたっている。

楽譜も広範囲に及んでおり、国内の図書館では所蔵されていないような希少楽譜も数多く含まれていることが分かった（山下、関根、東浦 2012)。

(2) ピアニストとしての園田

①伝統の系譜

師シロタから指導を受けた《小プレリュードとフーガ》には、トリルの入れ方や運指、注意書きなどが書き込まれており、その教授・学習過程の一部を垣間見ることができた。

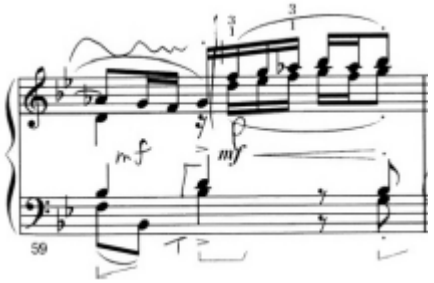
また、マネージャーから贈られたと言われるひげ文字の音楽辞典や、著名な音楽家たちから寄贈された著作物も多数発見されており、伝記的文献の中の出来事を、リアリティをもって理解することができた。

②書込みの意味

所蔵楽譜と園田による CD の演奏とを照合した結果、楽譜への書込みには次の８種類があることが分かった(山下、関根、東浦 2012)。

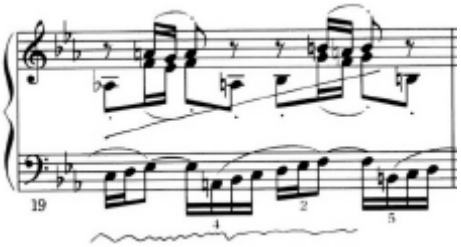
a)記号の強調　b)フレージングと息使い
c)時間にかかわる波線　d)音楽の句切れ
e)音楽の方向性　f)運指や手の使い分け
g)ペダル（ ___/ ）h)校訂作業に通ずるもの

これらの中でも、表現のために時間をとるという意味をもつ c)の波線(譜例１参照)は、レッスン時に歌い方を示す方法として取り入れられていたものである。



譜例１　《平均律》第２巻第 16 番フーガ第 59 小節
ヘンレ版、ビショップ版への書込みを東浦が再現
（楽譜は園田校訂版）

ただし、時間的な伸縮を示す以外にも、波線が用いられることがあった。譜例２では、波線により、２度上行を繰り返す緊張感が示されている。



譜例２　《平均律》第１巻第２番フーガ第 19 小節
ヘンレ版、ビショップ版への書込みを東浦が再現
（楽譜は園田校訂版）

③楽譜の校訂を通した音楽的、教育的な功績

所蔵楽譜のうち、《平均律》は少なくとも 57 冊存在する。原典版はもとより、多くの解釈版も揃えられていた。園田にとって楽譜の校訂を手掛けるということは、あらゆる版の楽譜に目を通し、その主だったものを丹念に比較検討して、その研究の成果を後世に残すという偉業にほかならなかったのである。

この音楽的、教育的な功績を一言で表せば、「一つの楽曲から生み出される演奏の多様さと複雑さを、校訂という論理的な形で投げ掛けたこと」（東浦 2012、p. 21）となろう。

(3) 教育者としての園田高弘

音楽教育学的な考察により、①～④の４点が明らかになった。

①理念

園田は、現代に生きる日本人が、西洋音楽に対してどのように向き合うべきかを、自らの生き方によって示すことが大切であると考えていた。

また、日本人の演奏に個性がないのは、その教師が「没個性」だからだと考え、自ら個性的な教師であり続けようとしていた。

②教材と指導内容

園田は、京都市立芸術大学に在職中、大学４年間で学ぶべき教材の選曲とその系統的な配列を行った。一例として、ピアノ専攻の１年生のために選曲された独奏曲の一覧を、表１に示す（資料提供は樋上由紀子氏)。

表１　「ピアノ科　課題曲　１回生」

独奏曲
J.S.バッハ：パルティータ第５番、 トッカータニ長調 BWV912 ベートーヴェン：ソナタ Op.2-3、Op.7、Op.27-1、 Op.31-1、2、3、Op.57、Op.81a、Op.90、 Op.109 ショパン：ロンド Op.16、 ソナタ Op.35、ポロネーズ Op.44、 スケルツォ第１番、第４番、 バラード第１番、第２番、第４番、 演奏会用アレグロ ドビュッシー：喜びの島、前奏曲、版画 フォーレ：夜想曲、舟歌、即興曲 グリーグ：バラード Op.24 ヘンデル：組曲第３番 ハイドン：ソナタハ長調（Hob.XVI:50)、 変ホ長調（Hob.XVI:52） リスト：３つの演奏会用練習曲、 パガニーニ練習曲第６番、 タランテラ、ハンガリー狂詩曲第 11 番、 ポロネーズ第２番 プロコフィエフ：ソナタ第３番 ラヴェル：ソナチネ シューマン：ウィーンの謝肉祭の道化 Op.26、 謝肉祭、ソナタ第２番、アレグロ Op.8 スクリャービン：ソナタ第２番（幻想ソナタ） ウェーバー：ソナタハ長調、変イ長調

指導内容としては、音色に関するものが多かった。タッチやペダリングと音色との関係について丁寧に指導されたという証言を多数得ている。
音色や色彩感の重要性は、自伝的文献でも繰り返し述べられており、これを指導内容の中心に据えていたことは想像に難くない。

③指導方法
指導方法について、園田は学習者に応じて変えるべきものと考えていたようである。
レッスンでは、イメージを喚起するような言語による指導が中心となっていた。模範演奏は多用せず、子どもが対象の場合や言語でイメージが伝わらない場合などに限定して用いた。さらに、いろいろな楽器の音色を模して歌ったり、身振りを伴いながら歌ったりし、ときには詩の朗読を表情たっぷりに聞かせることもあった。
楽譜への書込みは全般的に少なく、フレーズのおさめ方を示す記号（図１）やペダルの記号などが、その主なものであった。

図１　フレーズのおさめ方を示す記号（山下再現）

④教育の位置づけ
自伝的文献の分析と弟子たちの証言により、園田が教育を、生業としてではなく、芸術家の使命として行っていたことが明らかになった（山下 2012）。

(4) 演奏家研究の方法論
本研究では、様々な専門の研究者がチームを組んで研究することにより、一人では実現し得なかった、演奏家研究の一つの方法論を示すことができた。この方法論は、他の演奏家、音楽家にも応用が可能であると考える。

(5) 今後の課題
本研究を発展させ、今後さらに次の３つの課題に取り組みたいと考えている。
①CD 作成に至る過程
録音時に使用された楽譜の分析を通して、CD の演奏が完成するまでの道筋を明らかにする。

②伝統の系譜、再考
父、清秀やシロタらから受けた指導の実際とその影響について、より具体的に明らかにする。

③同時代の音楽家との関係性
同時代を生きた他のピアニスト、音楽家との比較研究を行い、その影響関係を明らかにする。

５．主な発表論文等
（研究代表者、連携研究者および研究協力者には下線）

〔雑誌論文〕（計２件）
①山下薫子、音楽教育者としての園田高弘、東京藝術大学音楽学部紀要、査読有、第 37 号、2012、pp. 171-185

②東浦亜希子、J. S. バッハ《クラヴィーア曲集》の校訂譜にみる園田高弘の教育的功績、音楽教育研究ジャーナル、査読有、第 37 号、2012、pp. 15-24

〔学会発表〕（計１件）
①山下薫子、音楽教育者としての園田高弘――教材分析と弟子への聞き取り調査を中心に――、日本音楽教育学会第 41 回大会、2010 年 9 月 26 日、埼玉大学（埼玉県さいたま市）

〔図書〕（計１件）
①山下薫子、関根和江、東浦亜希子、発行者：山下薫子（東京藝術大学）、園田高弘研究――使用楽譜と蔵書の解析及び弟子へのインタビューを通して――（平成 21～23 年度科学研究費補助金（挑戦的萌芽研究）研究成果報告書）、2012、全 88 頁

６．研究組織
(1) 研究代表者
山下（坂田）　薫子
（YAMASHITA-SAKATA　KAORUKO）
東京芸術大学・音楽学部・准教授
研究者番号：90283324

(2) 研究分担者
なし

(3) 連携研究者
大角　欣矢（OSUMI　KINYA）
東京芸術大学・音楽学部・教授
研究者番号：90233113
園田　みどり（SONODA　MIDORI）
東京芸術大学・音楽学部・非常勤講師
研究者番号：60421111
関根　和江（SEKINE　KAZUE）
東京芸術大学・音楽学部・助教
研究者番号：10242257

(4) 研究協力者
東浦　亜希子（HIGASHIURA　AKIKO）
上山　典子（KAMIYAMA　NORIKO）
山中　和佳子（YAMANAKA　WAKAKO）
甲斐　万里子（KAI　MARIKO）
中津川　侑紗（NAKATSUGAWA　ARISA）